

Case 18-2005: A 45-Year-Old Woman with a Painful Mass in the Abdomen

【症例】45歳女性 【主訴】痛みを伴う腹部腫瘍

【Problem list】

#1. 右下腹部腫瘍

4 cm大, 不整形で固く, 軽度圧痛を有する腫瘍を右下腹部(Pfannenstiel incisionの2 cm頭側, 正中より3 cm右)に認める。2年半前に気付かれ, 約1ヶ月に1回, 4—5日続く強い痛みを認める。痛みの強い時期もある。少なくとも入院5週間前からは明らかな増大傾向はない。

画像上は:

AUS: 3.5x3.5x1.0 cmのmixed—hypochoicな充実性でhypervascularな腫瘍が腹直筋内に存在し, 筋線維を圧排している。
造影CT: 不整形, 造影効果のない内部不均一な腫瘍。

#2. 肝内SOL

入院3週間前のCT検査で気付かれた, 肝右葉下部の, 径2cm弱大の病変。

画像上は:

造影CT: 径1.9 cm, 境界は比較的不鮮明で造影され, 早期にwashoutされる。
MRI: 径1.7x1.8, T1 iso—low, T2わずかにhigh。Gdで強く増強。

#3. 肝嚢胞

CTでlow, MRI T2 highの複数の肝内病変を認めた。

#4. 脂肪肝

画像診断上fatty liverとされた。血清生化学検査データがないため, 肝機能や脂質代謝能などについては詳細不明である。

#5. s/p hysterectomy (h/o uterine fibroids)

42歳時, 子宮筋腫に対して子宮全摘術施行。両側卵巣は切除していない。Pfannenstiel incisionはその際のscarである。

#6. s/p Caesarean delivery (x2)

2回経妊, 2回経産。出産は2回とも帝王切開による。Pfannenstiel incisionはその際のscarである。

#7. 小脳pilocytic astrocytoma, gr1切除+放射線治療後

30歳時に施行。複視に対してはレンズで矯正し, 失調に対してはリハビリ療法を行った。失調は自覚的には改善を見ている模様だが, 複視・失調がよくコントロールされているか, 現在の自覚的症狀については詳細不明である。

#8. 胸椎Harrington rodsの挿入済

15歳時脊椎側彎症に対して胸椎Harrington rods挿入済。Flat back syndrome等, 合併症に対する評価については詳細不明。

#9. 両側肺上葉気腫性変化

画像上, 両側肺上葉に気腫性変化を認めた。肺気腫が疑われる。

#10. 両側乳房線維腺腫 摘出術後

28, 30歳時。詳細不明

#11. 両側乳管内乳頭腫 摘出術後

42歳時。病理診断はfocal atypical ductal hyperplasia + lobular neoplasia in situ。